大和文華館の生立（その2）

大和文華館館長　石澤正男

（左）大台原山中　（右）渓流
鹿子木孟郎（1874～1941）（宮内庁所蔵）

大東亜戦争が始ってまもない昭和17年の前半は日本国民の大半が度重なる戦勝のニュースに湧きたっていた時期でありました。このような時に矢代先生の主宰しておられた文部省の美術研究所では、今の若い世代の人々には恐らく想像もできないような事件がもちあがり、それが直接の動機となって矢代先生が実際には20年余の長い年月をかけて築きあげてこられた日本では唯一であり、また極めてユニイクな組織であった美術研究所を去られる結果になったのです。ここでその事件について詳しく述べる余裕はありませんのでごく簡単に触れておくことにします。

昭和16年12月８日は、ハワイのパール・ハーバーに停泊中のアメリカ海軍太平洋艦隊に日本軍が奇襲攻撃をかけて驚異の大戦果を納めた日ですが、この日を期して米英に対する宣戦の詔勅がくだされ、日本国民は一瞬の中に未曽有の緊張と興奮の坩堝（るつぼ）に投げこまれたのです。政府はこの緊張を維持し愛国心を奮起させるため毎月８日を大詔奉戴日と定め、この日には各機関の長が全職員を一堂に集めて厳粛に詔勅を奉読せしめるように命じました。

昭和17年１月８日は最初の大詔奉戴日となり美術研究所でも大詔奉戴式が行われたのですが、矢代所長は２、３箇所詔勅を誤読するという、いわゆるハプニングがあったのです。かねがね矢代所長は親英米派とみられがちでしたので、この詔勅誤読事件があってから研究所内の一隅には所長排斥の険悪な空気がうごめいていたようでした。２月３月はいずれも８日が日曜日のため式はなく、第２回の奉戴日が４月８日でした。まずいことにこの日も矢代所長は１月と同じように詔勅の誤読をされたのです。そこで所長排斥派の急先鋒は文部省へ密告するのを手はじめに積極的な排斥運動を始めました。研究所内部はそれがため所長擁護派と中間派に三分されて混乱状態に陥ってしまいました。こんな事件の起る大分以前から私は矢代所長から遠からず官職を辞して研究に専念したいという強い意向を打明けられていましたので、私としてはこんなことで所長を傷けて退陣に追いこむことは極力避けたいと思って努力していたのでしたが、然し矢代所長としては研究所の創立以来最も重視し且つ優遇もしてきた部下の造反であっただけに、いわば子飼いの犬に手を噛みつかれたわけですから、なんともやりきれない気持で、かえって辞意を促進する結果になったようです。それで矢代所長は最も信頼できる後任者の内諾をえた時点で６月30日、美術研究所長兼東京美術学校教授の地位をあっさり辞任されたのでした。

「矢代が官職を退いたそうだ」という話が友人間に伝わると、稀有の秀才としてその学識と才幹を敬愛していた先輩たちから早速温い手が差しのべられてきました。その第一がほかならぬ近鉄社長の種田さんからでした。

ここで少し脇道に入るようですが、種田と矢代という２人の傑物の出会いについて一つの挿話をお伝えしておきます。この話は私も直接矢代先生から伺ったことがありますが、鶴見祐輔著「種田虎雄伝」にくわしく述べられていますので、ここではかいつまんでお話しすることにします。

昭和７年の秋、現在の日展の前身である帝展（帝国美術院主催の美術展覧会の略称）の開催中のある日、当時帝国美術院幹事を兼ねていた矢代所長が展覧会事務所で執務中、当時大軌（近鉄の前身）の専務取締役であった種田さんの訪問を受けられました。種田さんの要件は「吉野は大軌の沿線では昔から桜と紅葉で有名だが、自分は特にその奥にある大台原山中の渓谷美が素晴らしいと思っている。それで有名な鹿子木孟郎（かのこぎたけしろう）画伯にお願いして出来た「大台原山中」と「渓流」と題した油絵（挿図参照）がこの展覧会に出品されているのですが、我々素人目には実に立派な出来栄えだと思う。もしもこれが専門家から見ても非常に優秀であり政府買上げに値するほどならば是非そうしてもらいたい。国に費用がなければ会社で出して寄附してよろしい。然しあの作品にそれほどの価値がないならば、自分は無理にお願いするつもりは毛頭ない。そんなことをすれば情実によって美術奨励の標準を誤まらせることになるからだ。公平に判断してあの作品が優秀で政府買上げとなり、「文部省御買上」なり「宮内省御買上」という金札がつけば、とりもなおさず世間一般の吉野渓谷の美に対する認識を高め、印象を深めることになると思うので自分は満足する。一つ考えてもらいたい。」というお申出でありました。宣伝とか運動とかいうと、えてしてあくどいか、品が悪いか、あるいは私利のまといついた情実の多い世の中で、種田さんの誠におおらかで、筋も通り正々堂々とした考え方に矢代所長は深い感銘を受けたのです。そこで正規の手続きを経てこの作品は宮内省御買上げとなり金札がつき種田さんの希望通りになったのでした。（つづく）

（49・11・７記）

季刊 美のたより No.30
昭和49年12月1日
発行　大和文華館

Copyright ©2007 The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.